NO.5

秋田さきがけ(夕)　昭和57年9月11日　土曜日

実った"愛の一粒"運動

善意の米は8トンに

今月末にも 県外からも米や現金 ソマリアへ

集まった善意の米を倉庫に運び入れる佐々木さん(西仙北町刈和野農協で)

飢えに苦しむアフリカ・ソマリア共和国の難民に米を贈ろうという"愛の一粒"運動は、目標にほぼ近い約八トンの米が集まり大きな実を結んだ。運動を提唱した青年たちは、この善意の米の収集と今月末に予定されている積み出しの準備に追われている。

この運動を展開した日本ユニセフ協会「秋田友の会」＝代表・佐々木正光さん(三二)仙北郡西仙北町刈和野二五＝は、会員わずか十四人のボランティアグループ。さる一日から一週間、会員たちのいる秋田市や大曲市、西仙北町、神岡町、南外村など五市町村の小、中学校、公民館に段ボール箱やポリ袋を置き、児童や主婦らに呼びかけ米を持ち寄ってもらった。

その結果、十日までの集計で約百三十俵、八トンが集まった。最も多いのは秋田市が半分以上の四・二トン、次いで大曲市、西仙北町などとなっている。そのほか運動を知った岡山や山口などの県外の篤志家からも米や現金が寄せられたという。これらの米は会員らが米袋に一俵ずつ詰め替え、代表の佐々木さんが住んでいる西仙北町の刈和野農協の協力で、同倉庫に保管してもらっている。予定では今月末ごろトラックで横浜港に運び、そこから日本郵船の貨物船でソマリア国に輸送、さらに国連のWFP(世界食糧計画)の手で難民キャンプまで送られることになっている。

「反響にびっくり」

この運動を始めたのは、会員が飢えに苦しむソマリア難民の悲惨な状況を伝えた新聞や写真集を見たのがきっかけ。それら難民になにか援助の方法はないものかと話し合った結果、身近に豊富にある米のプレゼントを思いついたという。代表の佐々木さんは「予想以上の反響があり、びっくりしている。それだけ私たちの運動に共鳴してもらったものと思い、お米を持ち寄ってくれた方たちに感謝している。これからまだ現地への輸送という大きな仕事が残っているが、最後まで力を尽くし多くの人たちの善意をぜひ生かしたい」と語っている。

9/14 さきがけ 夕 1面

愛の一粒

杉

飢えに苦しむアフリカ・ソマリアの難民に米を贈ろうという"愛の一粒"運動は、最近にないさわやかな話題だった。日本ユニセフ協会「秋田友の会」(佐々木正光会長)が提唱したこの運動、わずか一週間で目標にほぼ近い約八トンの米を集めたとは十四人の会員をはじめ、秋田市や大曲市、西仙北町、神岡町など会員の母校の小学校とその父母らの努力に負うところが大きいが、この運動そのものが政治的にも、利害も何もない、全くの「無償の行為」だからこそ、さわやかな賛同を得たのだろう。

☆

ソマリアを選んだというのは、たまたま仲間の会員がソマリアの惨状を伝えた新聞記事や写真集を見たことからだったが、学生時代に東南アジアやエジプト、モロッコなど北アフリカ諸国を一人で回り、食糧難に苦しむ開発途上国の悲惨さを肌で感じてきたことが底流になっている。

ソマリアはエチオピアとジ[illegible]アフリカの「角地域」と[illegible]インド洋から紅海に通じる航路上重要な[illegible]近年注目されている。それぞれの国の複雑な種族間の争いに加え、各国同士が周辺の国を巻き込んで紛争を繰り返し、その渦にはソ米や中東諸国などが絡み、なかなか紛争の火種が消えない所だ。紛争のあるところ、経済が疲弊し、国は荒廃、食糧難は深刻—ソマリアに限らず、紛争の続くアフリカでは五百万人もの難民が救いの手を待っているといわれる。

☆

一方、佐々木さんらがユニセフの会をつくったというのも、いささか[illegible]であった。一九四六年(昭和21)十二月、国連総会で決定された国連国際児童緊急基金の略語で、第二次大戦で犠牲となった児童の救済を目的に設立された。その後、開発途上国の児童に対し直接の援助を行うことに変わり、名称も国連児童基金となったが、ユニセフという略称はそのまま残しているのだ。"愛の一粒"運動を成功させるため同協会の友の会をつくったというが、経済大国日本では忘れかけられていた名称である。今後さらに仲間を増やし"無償の行為"を積み上げてほしい。

57.9.13 さきがけ 朝

時の顔

難民救済のための"愛の一粒"運動を成功させた

佐々木正光(ささき・まさみつ)氏

飢えに苦しむアフリカ・ソマリア国の難民に米を贈ろうと、今月初めから県内各地で"愛の一粒"運動を提唱。佐々木さんの考えに同調した仲間十三人と日本ユニセフ協会「秋田友の会」をつくり、会員の住んでいる秋田市や大曲市、西仙北町、神岡町などで運動を繰り広げた。その結果、一週間で目標にほぼ近い八トンの米が集まった。「初めはどの程度集まるか心配だったけど、予想以上の反響があった」と振り返る。

西仙北高から東京の大学に進み、卒業後東京都庁へ。四年前故郷にUターンし、父親の仕事を手伝うかたわら石炭ストーブの販売や浄化槽の施工、管理を行う会社を設立、現在はその代表取締役。学生時代に東南アジアやエジプト、モロッコなど北アフリカ諸国を一人で回り、第三世界の実態をつぶさに見て来た。ソマリア国には行かなかったが、食糧難に苦しむ開発途上国の悲惨さを肌で感じて来た。この"愛の一粒"運動を起こす前にもボランティアグループ「金曜会」を組織、町内の清掃や雄物川の美化などの運動を繰り広げている。

「仕事が曲がりなりにも軌道に乗るにつれ、このままでいいのかという思いが頭をもたげてきて…。その時見たのがソマリアの苦況を伝えた新聞記事や写真集で、とたんにこれらの子供たちを救わなければと思い、いてもたってもいられない気持ちになった」と運動のきっかけを語る。

米の現物寄贈というユニークなアイデアだったが、実現まではかなりの曲折があった。それでも無料で米をソマリアまで運んでくれる日本郵船の貨物船が見つかったり、現地では国連のWFP(世界食糧計画)が難民キャンプに送ってくれることになっている。このため、あとは米をできるだけ早く回収、今月中にも横浜港へ運ぶだけ。「やっと成功の見通しがついたが、なにをするにも人手とお金がかかり、仲間不足を痛感した」と、運動を展開しての実感もちょっぴり。生後九カ月の女児と妻真由美さん(二四)の三人家族。西仙北町刈和野字上ノ台荒屋敷一一四一一〇、三十二歳。